

## 論文の要旨

論文題目 中国と日本における『椿姫』翻訳の比較研究  
氏名 王虹  
学位 博士（文学）  
授与年月日 平成 18 年 12 月 28 日

本論文は、アレクサンドル・デュマ・フィスの『椿姫』(*La Dame aux Camélias*)の中国と日本における翻訳を主対象にして翻訳と文化の密接な関係を論じるとともに、19 世紀末から 1930 年代までのフランス文学の翻訳を、翻訳論、翻訳出版、翻訳小説及び翻訳劇という四つの方面に分けて論じ、翻訳作品の特徴を考察したものである。

パリの高級娼婦マルグリットと青年アルマンの恋をテーマにした『椿姫』は、小説のかたちで 1848 年に発表された後、作者自身によって劇化され 1852 年にパリで上演された。その後、オペラ、映画、バレエのかたちで今日でも上演され続けている。中国と日本において、この作品が翻訳されたのは 19 世紀末であり、本論文においては、中国と日本における小説と劇『椿姫』の翻訳、出版、上演の歴史をたどり、19 世紀パリ独特の「高級娼婦」族に属するマルグリットが、中国と日本においてどのように捉えられ、表現されたかを解明したうえで、翻訳作品がどのように受容側の歴史と文化に影響を与えるのか、また受容側の歴史的・文化的コンテクストがいかに翻訳者、翻訳過程、および翻訳作品の受容に影響を与えるか、という問題を検討する。

第 1 章では、伝統的翻訳論とナイダを代表とする 1970 年代以前の翻訳理論、さらに 1970 年代以降の現代翻訳理論を対象として、翻訳の方法、翻訳の目的、翻訳の受容について考察し、本論文の目的と研究方法を述べている。異文化接触の場面において翻訳は大きな役割を担っており、中国古代の仏典翻訳者たちから西洋の歴代の翻訳者たちに至るまで、翻訳者は原文の「忠実」な翻訳作品を創るために、常に完全な翻訳方法を探求した。「直訳」すべきか「意訳」すべきか、「形式」と「内容」をいかに融合させて分かりやすい翻訳を完成するかという問題の論争は長く続いていた。20 世紀後半には、翻訳理論の新しい視点が登場し、翻訳の言語学的特性とその言語の背後にある文化的特性が重視されるようになる。1970 年代に提起されたポリシステム論、記述的翻訳研究理論などは、いずれも翻訳テキスト志向の理論であり、翻訳を目標言語の多様な文化的コン

テキストの中に置いて、その翻訳作品の文化的機能を研究するという姿勢を取っている。このような理論と方法は、翻訳研究を比較言語学・比較文学の領域から比較文化の枠組みへ発展させたことに意味がある。本論文はこの比較文化の観点から、中国と日本の翻訳文学を目標言語の文化的コンテクストに置いてその様態を検証する。

第2章では、近年出版された翻訳文学に関する年表や目録をもとにデータを集計・分析し、明治時代の翻訳文学と清末民国初期における翻訳文学の総合的な動勢や両者の共通点と特徴について考察したうえで、受容側の社会的・歴史的要因がいかに関訳文学に影響を与えるかという問題について論じている。従来、明治時代は日本における翻訳文学が最も発達した時期とされているが、分析の結果、実際には明治35(1902)年以降、明治末(1912)年までの10年間に刊行されたものがその大半を占めることが判明した。しかし、明治10、20年代に刊行された翻訳文学の数は比較的少ないとはいえ、その影響力はきわめて大きく、翻訳を通してさまざまな異質的な要素が伝えられ、文学の形式や文体の革新を引き起こすことになる。西洋文学の翻訳が盛んとなった清末民国初期における翻訳文学についても同様の現象を見ることができ、日本語に翻訳された西洋文学が科学小説や探偵小説を含めて、数多く中国語に重訳されて中国に多大な影響を与えたことについて分析する。

第3章では、中国と日本における小説『椿姫』の翻訳と受容のあり方について、次の2点を中心に考察する。

(1) 翻訳作品の受容はその作品の内容や形式がどの程度「忠実」かによるのではなく、受容側の歴史的・文化的文脈によって影響される。同じ原文から訳されたデュマ・フィスの作品の中国語版と日本語版から、日中両国の読者は異なる反応を見せている。中国において『椿姫』は当初から純文学と見なされ、小説の位置を高める役割を果たしたが、日本では、政治小説が重要視されている時期に翻訳紹介されたこともあり、単なる「人情小説」とみなされ、中国の場合ほど大きな役割を果たしたとはいえない面もある。

(2) 翻訳作品に対する翻訳者の理解の仕方は、時代によって異なる。翻訳は異なる文化を架橋する作業であるため、その二つの文化間の相互的理解度は翻訳に影響を与える。異なる文化が初めて接触する場合には訳しても分からないことが多く、原文を「忠実」に伝えることは困難であるが、相互的理解が深まるとともに原文への理解がより明晰になり、分かりやすい翻訳が可能となる。翻訳は文化の発展に大きな役割を担うが、文化の発展、特に異文化交流の発展においては、文化が逆に翻訳に影響を与える。

第4章では、劇『椿姫』の翻訳と上演の歴史を踏まえて、日本と中国における戯曲の翻訳と翻訳劇の上演に関する問題点を考察している。中国では1907年

に、日本における中国人留学生たちが林纾 訳小説『椿姫』に基づいて劇を作り、まず東京で上演し、後に中国本土でも上演した。日本にいる留学生たちが『椿姫』を演じたことを契機にして、中国における新しい演劇の様式としての「話劇」がその歴史の幕を開けることになる。しかし、中国においても日本においても娼婦の恋をテーマとした『椿姫』を舞台上で上演することは容易ではなく、劇『椿姫』はさまざまな形のマルグリット像を生み、原作と全く異なる『椿姫』も存在していた。原テキストに忠実でない翻案はしばしば批判の対象となるだけでなく過小評価されがちであるが、実際には翻案劇は、当時の観客に外国戯曲を受け入れさせるための訳者たちによる一つの工夫でもあったと言える。訳者は舞台上での上演を考え、故意に原文に忠実ではない台詞を創り、地名や人名を日本風や中国風にしたのである。こうしてできた翻案劇は、翻訳劇より日本や中国の近代劇の創出に大きな影響を与えた。

第 5 章では、以上の考察を踏まえたうえで、現代の翻訳理論の視点から『椿姫』の翻訳および中国と日本の翻訳文学の共通点と差異を指摘し、「翻訳の時代」と言われている明治期と清末民国初期における翻訳文学の特徴をまとめる。